福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1465集

麦野C遺跡 12

―第１９次調査の報告―

２０２２

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1465集

麦野Ｃ遺跡 12

―第１９次調査の報告―

調査番号 2029
遺跡略号 MGC-19

２０２２

福岡市教育委員会

遺跡名	麦野Ｃ遺跡	調査次数	19 次	調査略号	MGC-19
調査番号	2029	分布地図図幅名	13　雑餉隈	遺跡登録番号	0050
申請地面積	555.86㎡	調査対象面積	449.00㎡	調査面積	296㎡
調査期間	令和２（2020）年１０月１２日～１２月１８日			事前審査番号	2020-2-135
調査地	福岡市博多区麦野６丁目１２番１２				

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われており、博多区麦野周辺には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う麦野C 遺跡第19次調査について報告するものです。調査では溝などが出土し、中世から近世の麦野C遺跡の様相を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和４年３月24 日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　　言

１．本書は令和２(2020)年10月12日から12月18日に福岡市教育委員会が行った、博多区麦野６丁目４ - 15 所在の麦野C 遺跡第19 次調査の発掘調査報告書である。
２．本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
３．遺構の性格を示す記号として、SC(竪穴建物)、SD(溝)、SK(土坑)、SP(柱穴およびピット)を用いた。
４．本書に掲載した遺構・遺物の実測図は赤坂亨が作成した。
５．本書に掲載した挿図の製図は赤坂が行った。
６．本書に掲載した写真は赤坂が撮影した
７．本書の編集・執筆は赤坂が行った。
８．本書に関係する記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

本 文 目 次

Ⅰ はじめに …… 1
1 調査に至る経緯 …… 1
2 調査組織 …… 1
Ⅱ 立地と周辺の調査 …… 1
Ⅲ 調査の記録 …… 4
1 調査の概要 …… 4
2 溝 …… 6
3 竪穴建物 …… 15
4 その他遺物 …… 16
Ⅳ 考察 …… 17
1 遺構の時期区分と性格 …… 17
2 資料からの検討 …… 17
Ⅴ 引用文献 …… 19
附 調査写真 …… 20

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図（1/25,000） 2
図2 麦野遺跡調査地点位置図（1/4,000） 2
図3 調査地点周辺空中写真 （昭和23年） 3
図4 麦野遺跡調査地点位置図（昭和初期） 3
図5 調査区位置図（1/300） 4
図6 遺構配置図（1/150） 5
図7 溝SD-1・２・３・４・５平面図（1/100） 7
図8 1区SD-1・2土層図（1/60） 8
図9 2区SD-1・２・3・4・5土層図（1/60） 8
図10 SD-1 最下層・下層出土遺物（１/４） 9
図11 SD-1 上層出土遺物（1/4・1/2） 10
図12 SD-6平面図（1/100） 13
図13 SD-6土層図（1/60） 13
図14 SD-2・3・4・5・6出土遺物（1/4） 14
図15 竪穴建物SC-7平面図・土層図（1/40） 16
図16 ピット・攪乱・遺構外出土遺物（1/4） 16
図17 関連遺跡位置および地誌地名・道図 19
表1 麦野C遺跡第19次調査遺構時期区分 17
写真1 SD-1・2・3・4・5合成写真（上が北東） 20
写真2 1区全景（北東から） 21
写真3 3区全景（北西から） 21
写真4 2区全景（南西から） 22
写真5 1区溝SD-１・２（南西から） 22
写真6 1区SD-1・2土層A-A′（北西から） 23
写真7 1区SD-1・2土層B-B′SD-1部分（南西から） 23
写真8 1区SD-1・2土層B-B′SD-2部分（南西から） 23
写真9 SD-1・SD-1側溝（南西から） 24
写真10 SD-2・SD-2接続部（北東から） 24
写真11 SD-5土層C-C'・遺物№52出土状況（南西から） 24
写真12 SD-1分岐溝およびSD-1ピット列②（東から） 25
写真13 SD-1ピット列②（南から） 25
写真14 2区SD-3・4土層D-D'・SD-4土層G-G'・SD-4完掘状況（北東から） 25
写真15 SD-2・4・5完掘状況（南東から） 26
写真16 SD-5花崗岩（遺物№53）出土状況 26
写真17 SD-6土層H-H'（北から） 26
写真18 SD-6土層I-I'（南から） 27
写真19 SD-6土層J-J'（北から） 27
写真20 SC-7完掘状況（南から） 27

Ⅰ はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、博多区麦野６丁目12-12における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和２(2020)年5月21日付けで受理した(2020-2-135)。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野C遺跡の範囲であり、令和２年６月22日に確認調査を実施し、地表下40㎝で遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課は申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、予定建築物の構造および造成計画上、工事による遺構への影響が避けられないため、令和２年に発掘調査、同３年度に整理･報告を行い、記録保存を図ることで合意し委託契約を締結した。申請地555.86㎡のうち調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響がある449.00㎡である。

発掘調査は令和２(2019)年10月12日から12月18日に実施した(調査番号2029)。調査面積は296㎡、遺物はコンテナ４箱分が出土した。

2 調査組織

調査委託	株式会社リアン		
調査主体	福岡市教育委員会		
調査総括	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
		調査第２係長	藏冨士 寛
庶務担当	文化財活用部文化財活用課		松原 加奈枝
事前審査	文化財活用部埋蔵文化財課		田上 勇一郎・山本 晃平
調査担当	文化財活用部埋蔵文化財課		赤坂 亨

Ⅱ 立地と周辺の調査

麦野C遺跡は福岡平野南部の丘陵上に位置し、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市域の最南部にあたる。立地する台地は阿蘇４火砕流の堆積により形成されたもので、浸食により狭い谷が入り八手状に分かれる。この谷によって遮られた地形的なまとまりごとに、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡、麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡と呼称している[図１]。

これらの遺跡では旧石器時代の遺物や、弥生時代前期、中期末～後期の遺構が確認されている。奈良時代以後は８世紀を中心に各地点で住居跡が確認され丘陵の広い範囲に集落が広がり、大宰府との関係がうかがわれる。中世では麦野A遺跡では溝で囲まれた方形区画が確認され推定規模は東西約110m､南北約150mである｡諸岡B遺跡では､諸岡八幡宮の丘陵地で中世の方形区画と掘立柱建物群が､また、諸岡八幡宮から北約400mで14世紀後半～ 16世紀の平地城館である諸岡館が確認されている。

本調査地点は遺跡中央部にあたり、東西からの谷筋が入り込む付け根部分中央からやや北側に位置する。旧地形図では標高約18mであり、昭和初年頃の地図では旧道が調査地点を東北東から西南西方面に縦断している。

近隣では北西約20mで5次、東約60mで10次、北約20mで18次調査が行われている。近隣調査の特徴として、１・５・13次調査で８世紀の住居跡94棟以上が、７・８・９次調査で８世紀の住居跡２棟、

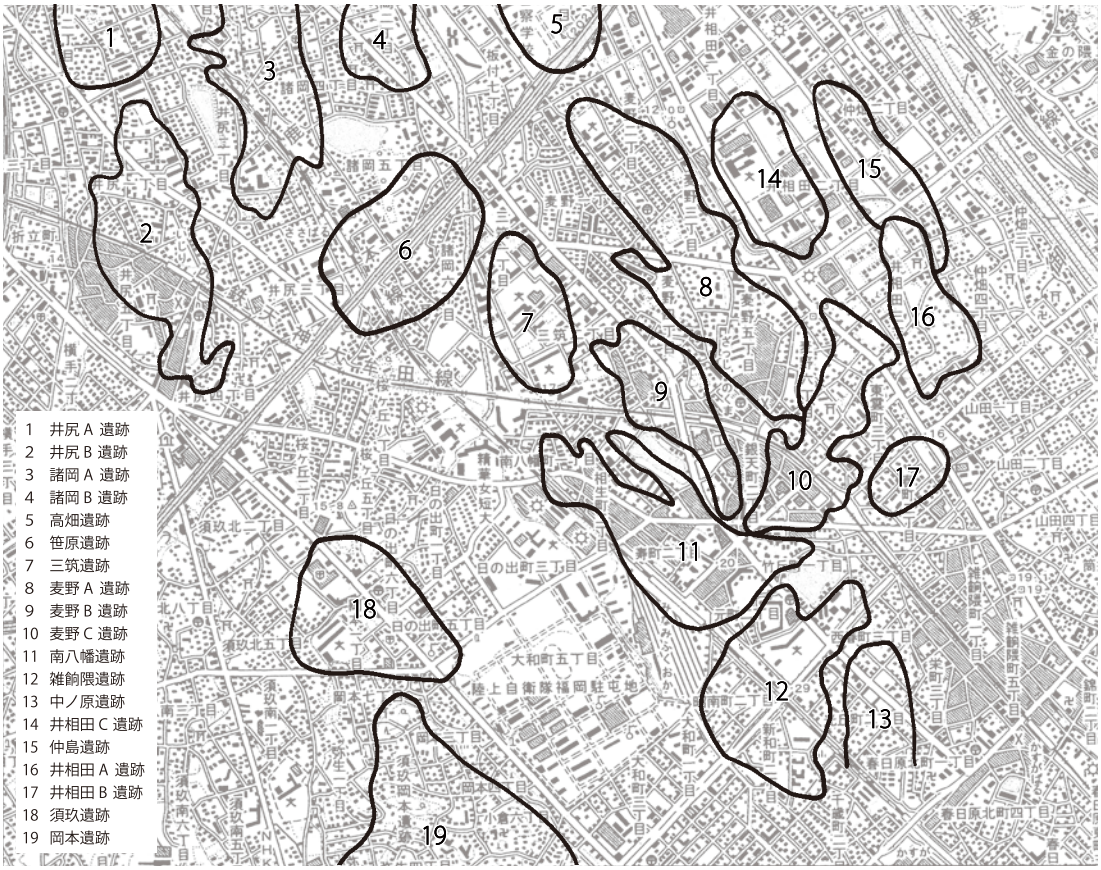


図1　遺跡位置図（1/25,000）

国土地理院発行2.5 万分 1 地形図を加工して作成

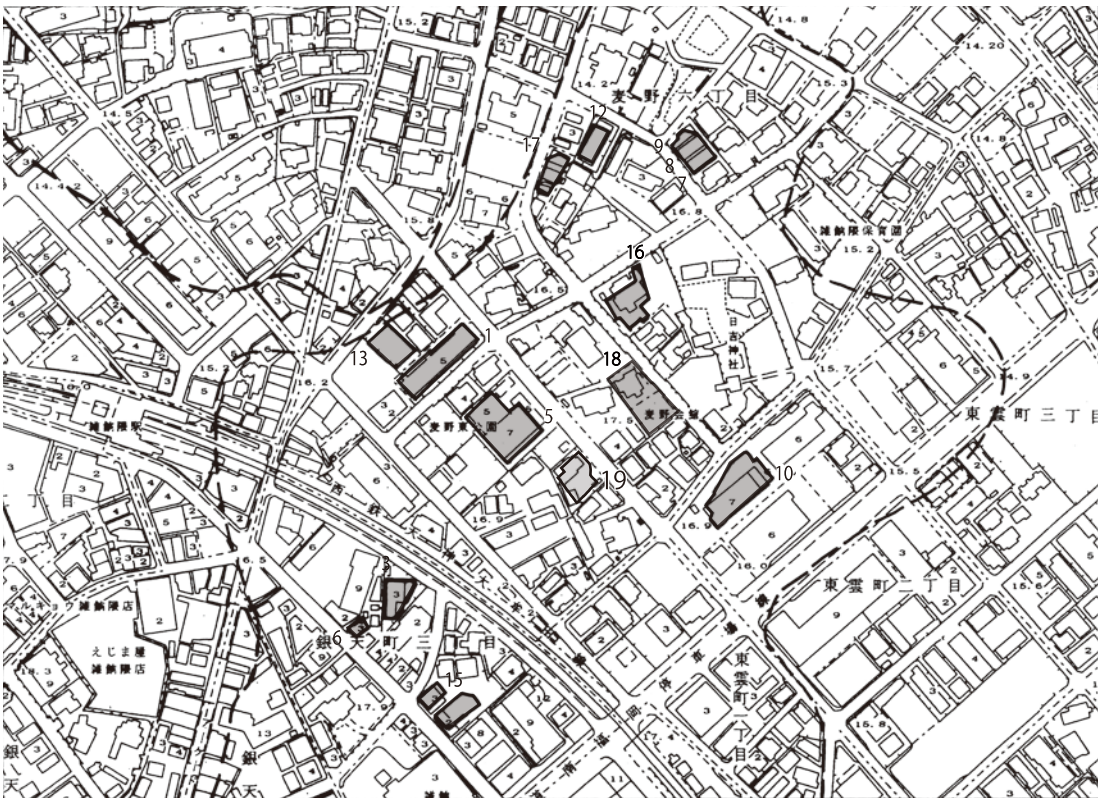


図2　麦野遺跡調査地点位置図（1/4,000）

数字は調査次数　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1435集より作成

掘立柱建物１棟が確認され、該期の遺構が密集するという点がある。現在のところ、８世紀の遺構は丘陵中央の標高が高い部分に集中がみられるが、調査地点周辺は、昭和50年実施の区画整理による削平により旧地形が大きく改変されており、これが遺構の密度、残存状況に影響を与えていることも注意が必要である［図３］。

また、５次調査では中世の土壙墓・方形竪穴状遺構・溝３条が、18次調査では15～16 世紀頃の北西から南東方向の大溝１条（幅約３m）と、小溝４条（幅50cm）が確認され、北東約70mの日吉神社には福岡市指定文化財である嘉暦三（1328）年造立の板碑があるなど、14～16世紀の遺構や遺物が確認されていることも特徴である。

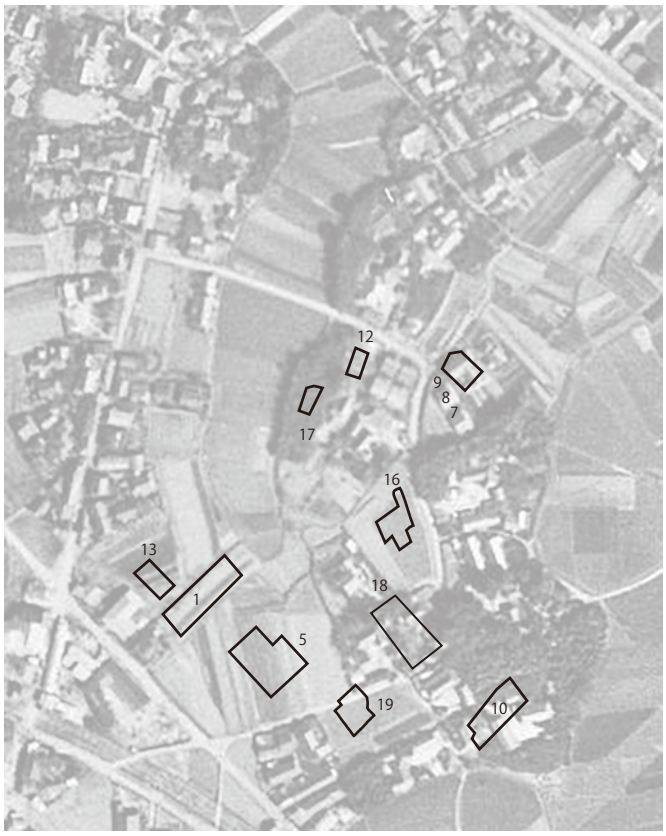


図3　調査地点周辺空中写真（昭和23 年）
国土地理院ウェブサイトデータを加工して作成

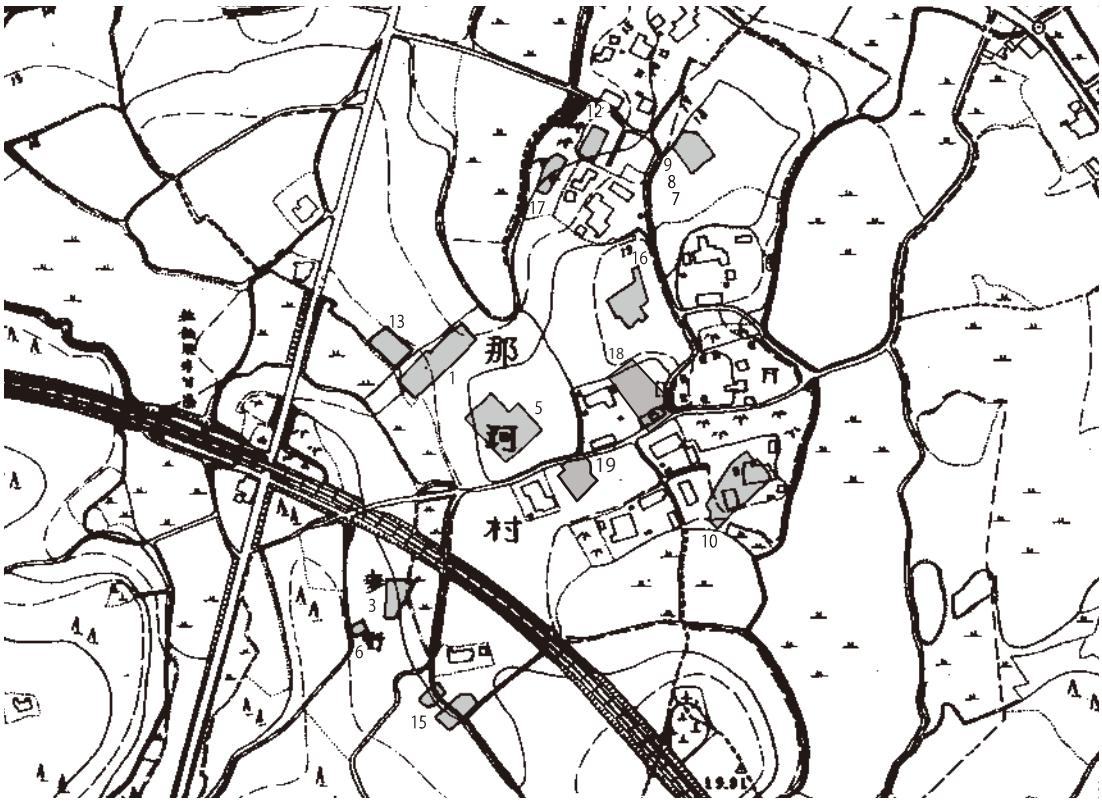


図4　麦野遺跡調査地点位置図（昭和初期）
数字は調査次数　市報第1435集より作成

Ⅲ　調査の記録

１　調査の概要

調査区は平面直角座標系(2系)X＝＋60772~＋60800、Y＝-49664~-49685の範囲に位置する。北東側は道路に面しほぼ同レベルで、北西側がやや低い。北西、南西、南東側はブロック塀を挟んで隣地に接する。調査開始時は建物解体後の更地であった。調査は廃土を場内処理する必要から対象地を３区に分けて反転し、１区、２区、３区の順に調査を行った[図5]。

遺構面は攪乱土壌を20 ～ 40㎝ほど除去した鳥栖ローム上面で、北～北西へ向かって緩やかに下がるが、調査区外では南東方向に向けて下り始めている。標高は17.0 ～ 16.7mである。検出した遺構は溝６条、竪穴建物１棟、ピットである[図6]。溝は東北東から西南西方向へ下る溝(SD-1・2・３)と、南から北方向へ下る溝(SD-４・５)と北北西から南南東へ下る溝(SD-6)がある。竪穴建物(SC-7)は削平を受け遺物もわずかだったため、時期不明であるが、近隣調査例から８世紀代の可能性がある。畑の耕作機械であるトレンチャー痕跡が南側の調査区全体に残されており、空中写真のように以前は畑地であったこと示している[図3]。溝の遺物は少なく、中世～近世を中心とする土器・陶磁器等や古代の須恵器が破片で出土した。溝は中世城館の堀として作られ、近世以後も道路として用いたとみられる。

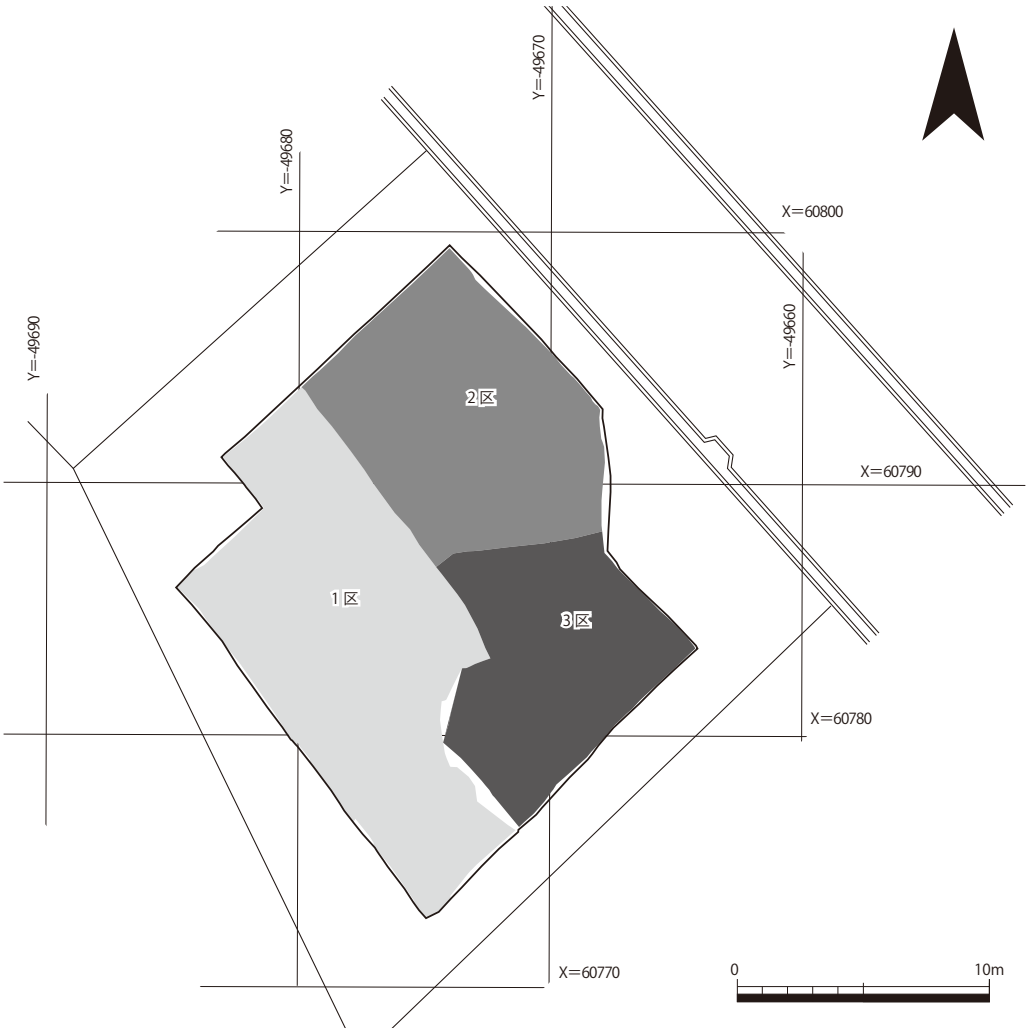


図5　調査区位置図(1/300)

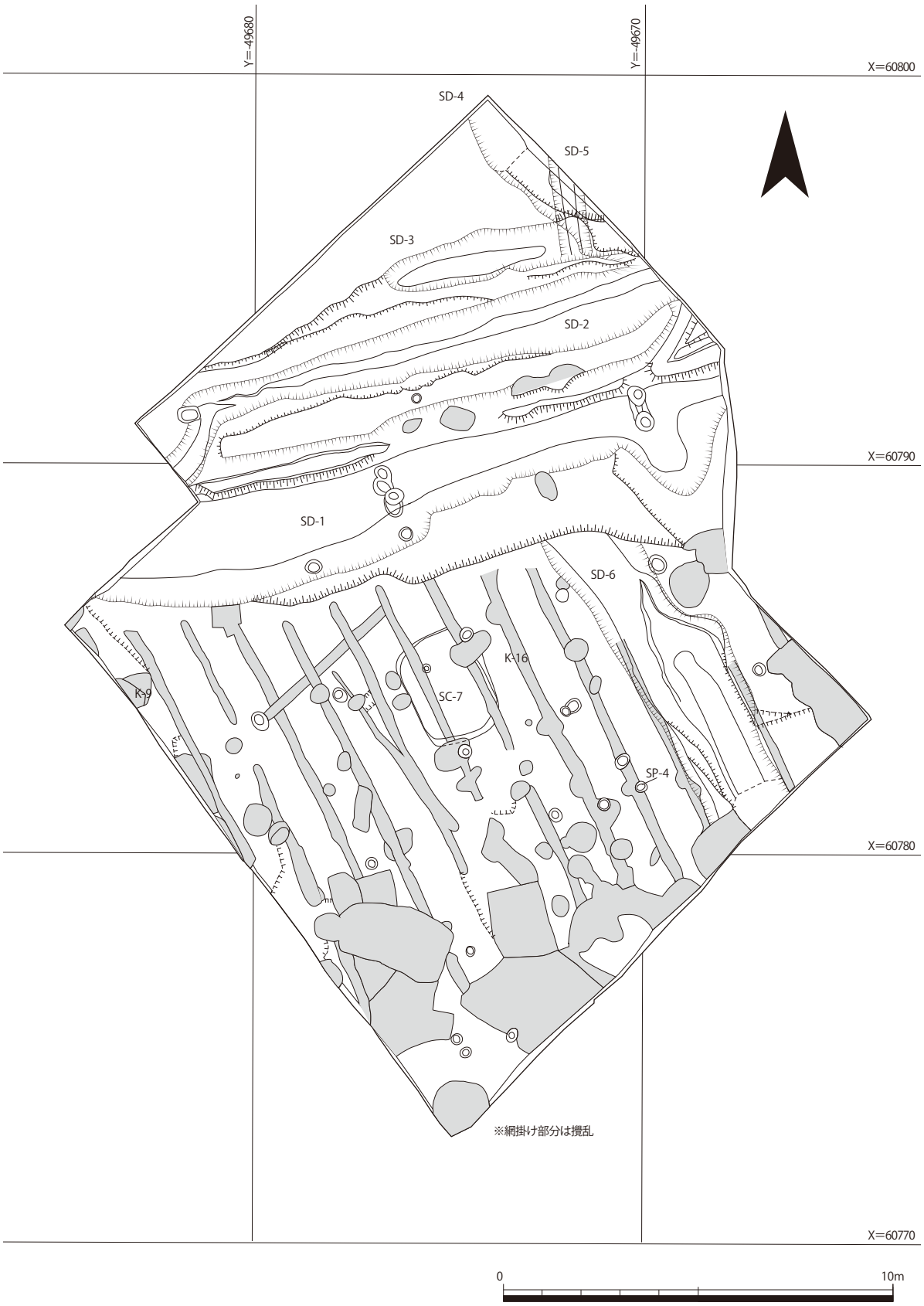


図6　遺構配置図（1/150）

2　溝

（1） SD-1

ア．遺構属性

地山掘り込みでつくられた開渠の溝。調査区全体やや北側を東北東から西南西に向けて縦断する。平面形状は直線だがSD-2接続部付近で東に傾きやや弧を描く。全長15m以上。主軸方位はN-73°-Eで、SD-2接続部付近ではN-80°-Eである。

断面は逆台形で、上面幅約3m、底面幅約1m、深さ約１mを測る。2区は東側ほど浅く、溝底の傾きの方向は東→西である。

溝底2か所でピット列①･②を検出した。ピット列①は1・2区境界付近に位置し、SD-1底面に直線～ややランダムに4つのピットが切り合う。長軸1.4m、最大幅0.6m、ピット深さ0.3mを測る。長軸方位はN-21°-W を測り、ほぼ溝SD-1に直行する。1組2基ピットが2組の痕跡とするなら、ピット間距離は芯々 0.6mを測る。

ピット列②は2区東側のSD-1分岐溝との合流地点付近に位置し、２つのピットがSD-1底面に直線的に芯々0.75mで並ぶ。長軸1.2m、最大幅0.5m、ピット深さ0.4mを測る。長軸方位はN-13°-W を測り、ほぼ溝SD-1に直行し、ピット列②の南側でSD-1の溝上面幅が広がっている。溝SD-1に直行すること、溝幅がピット列②付近で広がることから、特にピット列②は横断施設の柱穴痕の可能性がある。護岸施設・遮蔽施設はない。

イ．埋土

発掘時は、1・２区ともSD-1を上層①(検出面-30㎝まで＝標高17.1 ～ 16.8m前後)、上層②(SD-1側溝まで＝標高16.8 ～ 16.2m前後)、下層(標高16.2 ～ 15.9m前後)、最下層(標高15.8m前後)の4層に分けて発掘・遺物取り上げを行った。その後土層観察の結果22層[図8]は別の遺構と判明したのでSD-1上層として別項で取り扱う。SD-1の埋土は23 ～ 30層[図8]、34 ～ 36層[図9]である。

ウ．出土遺物

溝の規模に比して遺物量は少なく、すべて破片である。上層①②には他の溝の遺物も含まれており、確実なSD-1埋土出土遺物は下層および最下層の出土の遺物である。

最下層出土遺物は、1が土器鍋、7が土師器小皿、17が土器片口すり鉢である[図10]。時期比定可能なものは、14は底面糸切りで小皿ｂなら14 ～ 15世紀である(山本1992)。

下層出土遺物は、35･37が土器、9･10･11･36･38が土師器、3･12･13が瓦質土器、15･16が須恵器、5・14が陶器、6・7が磁器(白磁)、8が瓦、34が滑石石鍋である[図10]。時期比定可能なものは、土師器は9・10が小皿ｂ、38が杯ｂで14 ～ 15世紀(山本1992)、３は奈良火鉢深鉢Ｉで14世紀末～16世紀(立石1995)、13は瓦質土器擂鉢(河内和泉)で14世紀後半～ 16世紀(鋤柄1995)、16は須恵器蓋坏で古代、5は備前焼すり鉢で14世紀後半～ 16世紀(伊藤1995)、7は白磁椀Ⅸ類で13世紀後半～ 14世紀前半(山本2000)に位置付けられる。

16など一部を除き遺物の混入は少なく、また、17は最下層出土土器片と下層出土土器片が接合されており、下層と最下層に時期差はないと考えられる。遺物からみたSD-1は14 ～ 15世紀を中心とした時期で、16世紀に下る可能性もある。

（2） SD-1上層溝

ア．遺構属性

SD-1埋没後に形成された開渠の溝。土層で確認したもの。位置や主軸方向はSD-1に同じ。全長は

不明だがSD-1と同じと推定する。

断面は底面が丸い逆三角形で、調査区中央部では南側が広い不等辺三角形である。底面幅0.2m、上面幅1.3 ～ 2.7m、0.5m（東端・中央とも）を測る。溝底の傾きの方向は東→西である。

イ．埋土

22層［図8］が埋土である。SD-1・SD-1側溝埋土を掘り込んでいる。

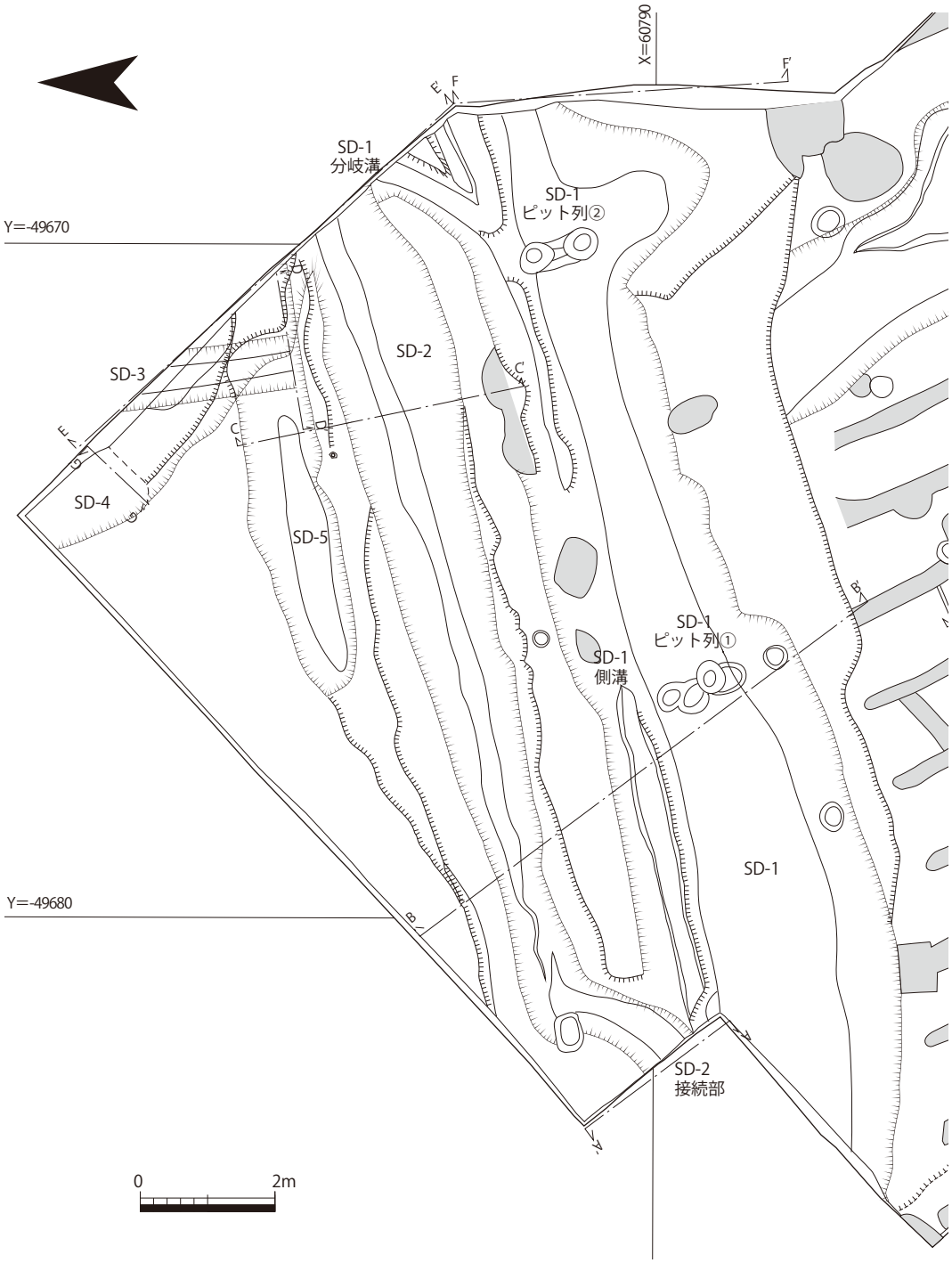
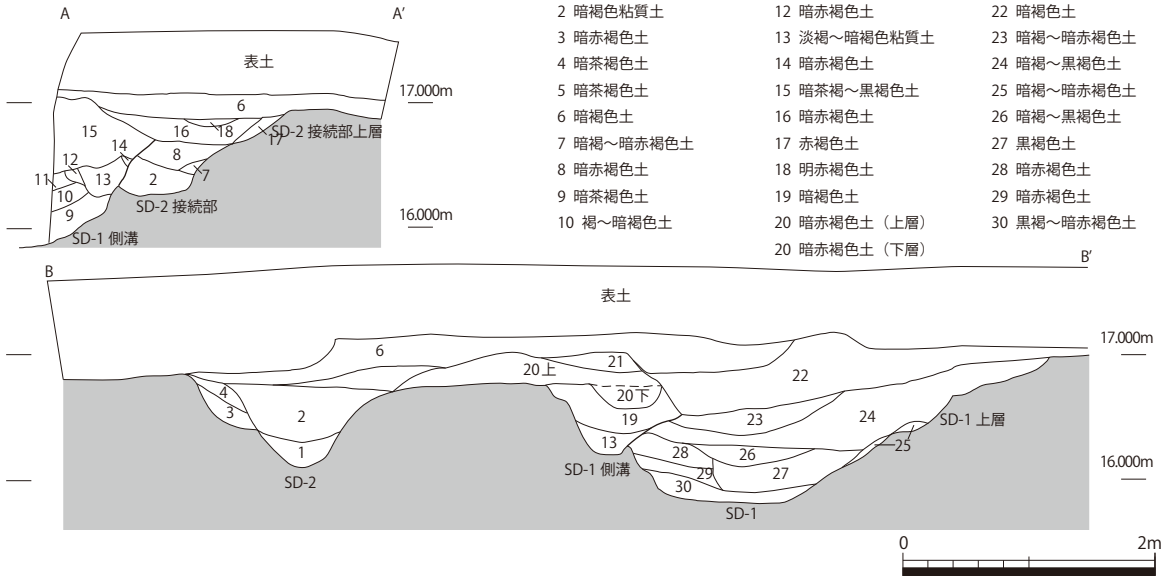
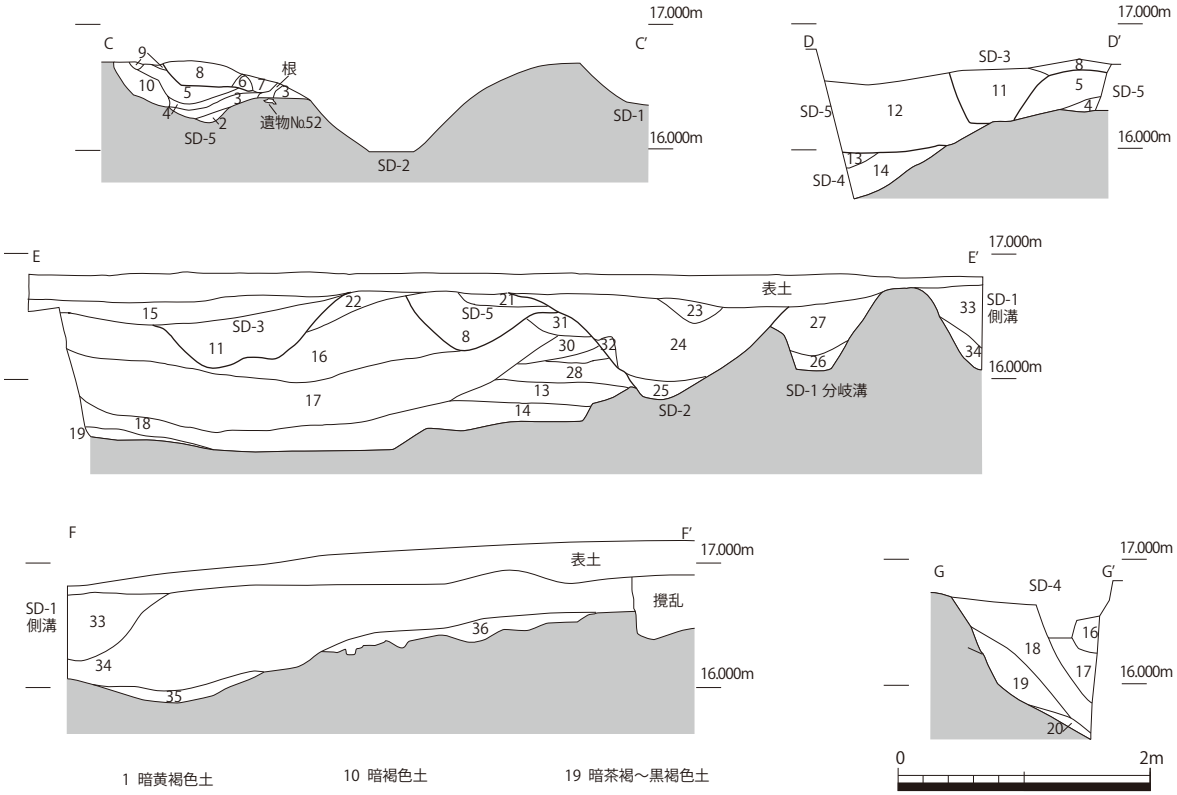


図7　溝SD-1・２・３・４・５平面図（1/100）



1 暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 暗赤褐色土
4 暗茶褐色土
5 暗茶褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐～暗赤褐色土
8 暗赤褐色土
9 暗茶褐色土
10 褐～暗褐色土
11 黒色土
12 暗赤褐色土
13 淡褐～暗褐色粘質土
14 暗赤褐色土
15 暗茶褐～黒褐色土
16 暗赤褐色土
17 赤褐色土
18 明赤褐色土
19 暗褐色土
20 暗赤褐色土（上層）
20 暗赤褐色土（下層）
21 暗赤褐色土
22 暗褐色土
23 暗褐～暗赤褐色土
24 暗褐～黒褐色土
25 暗褐～暗赤褐色土
26 暗褐～黒褐色土
27 黒褐色土
28 暗赤褐色土
29 暗赤褐色土
30 黒褐～暗赤褐色土

図8　1区SD-1・2土層図(1/60)



1 暗黄褐色土
2 暗黄灰～暗黄褐色土
3 暗黄褐色土
4 暗褐～暗黄褐色土
5 暗褐色土
6 暗褐色土
7 暗黄灰褐色土
8 暗黄灰褐色土
9 暗黄灰褐色土
10 暗褐色土
11 暗茶褐～黒褐色土
12 暗茶褐色土
13 暗黄灰～暗茶褐色土
14 暗灰～暗茶褐色土
15 茶褐色土
16 暗茶褐～黒褐色土
17 暗茶褐～黒褐色土
18 暗茶褐色土
19 暗茶褐～黒褐色土
20 暗黄褐～暗茶褐色土
21 暗橙～暗赤褐色土
22 暗茶褐色土
23 黒褐色炭・灰
24 暗褐～暗茶褐色土
25 暗褐色粘質土
26 暗茶褐色土
27 茶褐色土
28 暗褐～黒褐色土
29 暗橙色土
30 暗褐～黒褐色土
31 暗黄褐～暗褐色土
32 暗黄褐～暗褐色土
33 暗赤褐色土
34 暗茶褐色土
35 暗茶褐～暗褐色土
36 暗茶褐～暗褐色土

図9　2区SD-1・２・3・4・5土層図(1/60)

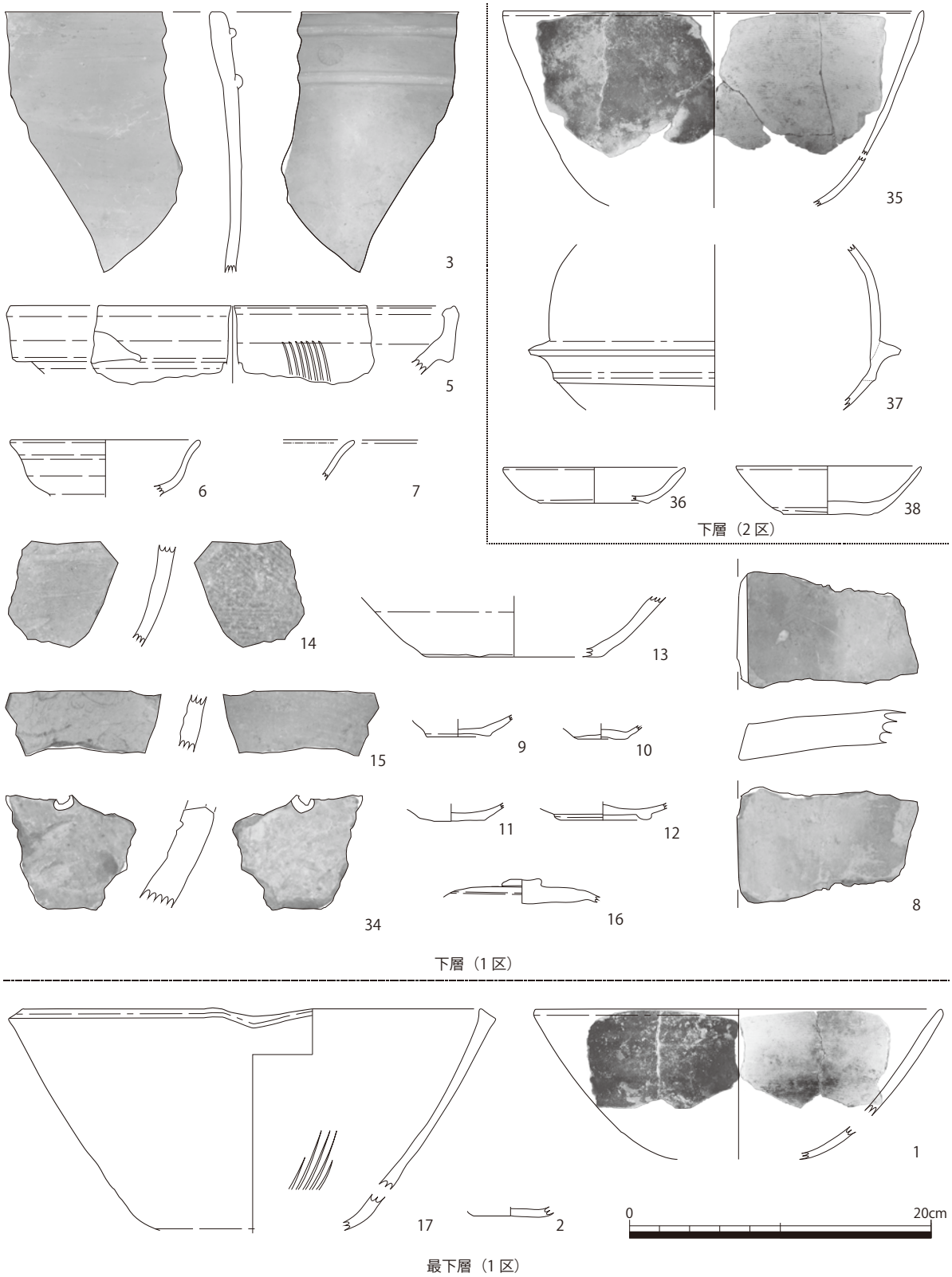


図10　SD-1 最下層・下層出土遺物（1 / 4）

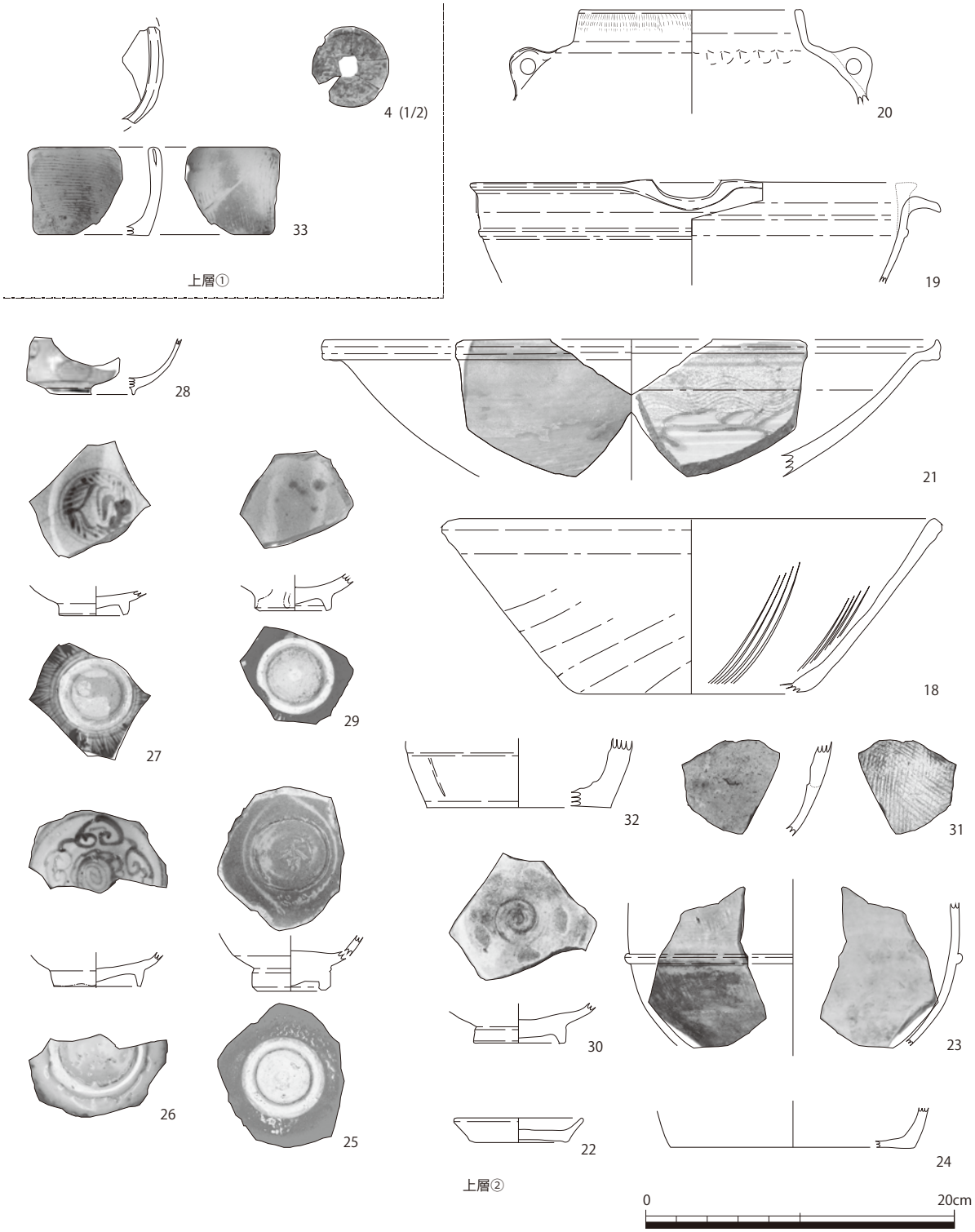


図11　SD-1 上層出土遺物（1/4・1/2）

ウ．出土遺物

上層①にはSD-1上層溝のほかSD-1側溝やSD-1の遺物を含む可能性があるが、土層観察からSD-1上層溝出土遺物が多いと判断し、ここで記述する。上層①出土遺物は、4が銅銭、33が土器浅鉢である[図11]。時期比定可能なものは、33は火鉢(在地系)なら14世紀以後である(山本1992)。遺物量が少なく、遺物からのSD-1上層溝時期比定は難しい。

（３） SD-1側溝

ア．遺構属性

地山、SD-1埋土掘り込みでつくられた開渠の溝。溝SD-1内の北側に並行して調査区全体を縦断する。平面形状は直線で、中央でやや途切れるが、西側4.8m・東側5.8mで、連続するならば13.8m以上を測る。主軸方位はN-77°-Eである。

断面は逆台形で、底面幅0.2m、上面幅0.9 ～ 1.3mを測る。SD-1上層まで側溝に含まれるなら上面幅2.9mとなる[図8]。溝底の傾きの方向は東→西でSD-1と同じである。

イ．埋土

9 ～ 15・19・20層[図8]、33層[図9]が埋土である。土層観察でSD-1埋土を掘り込んで作られたと分かったが、掘削時には土質で判別出来なかった。

ウ．出土遺物

上層②掘り下げ時にはSD-1とSD-1側溝を弁別できず一緒に取り上げている。土量からSD-1遺物＞SD-1側溝遺物と考える。

上層②出土遺物は、18が土器、22が土師器、20・23が瓦質土器、19・21・24～27・29～32が陶器、28が磁器(染付)である[図11]。

時期比定可能なものは、20・23は瓦質土器釜で中世後期～ 16世紀(鋤柄1995)、19は備前焼すり鉢で14世紀～ 16世紀(伊藤1995)、26・27は明染付碗でどちらも15世紀後半～ 16世紀前半(小野1982)に位置付けられる。前述のとおり上層②出土遺物はSD-1側溝よりSD-1の遺物が多いと推定されるため、遺物からの時期比定は難しい。

（４） SD-1分岐溝

ア．遺構属性

地山掘り込みでつくられた開渠の溝。2区東端付近でSD-1側溝から北側に分岐する。平面形状は直線でやや弧を描く。長さは1.5m以上。主軸方位はN-26°-Eである。

断面は逆台形でほぼ箱掘である。幅0.6m、深さ0.6mを測る。溝底の傾きの方向は不明。

イ．埋土

26・27層[図9]が埋土である。SD-2によって埋土が切られている。

ウ．出土遺物

出土遺物なし。

（５） SD-2

ア．遺構属性

地山、SD-1分岐溝・SD-4・5埋土掘り込みでつくられた開渠の溝。調査区北側をSD-1に並行し東北東から西南西に向けて縦断する。平面形状は基本直線(直線部)だが、調査区西側付近で角度を変えSD-1に接続する(接続部)。全長は直線部12m以上、接続部2.6m以上・主軸方位は直線部N-74°-E・接続部N-28°-Eである。

断面は底面やや丸底の薬研堀で、上面幅は直線部1.1 ～ 1.6m・接続部0.7 ～ 0.9m、深さは直線部0.4 ～ 0.7m・接続部0.3 ～ 0.7mを測る。溝底の傾きの方向は直線部西→東、接続部北→南で逆向きである。

イ．埋土

1～4・27層[図8]23～25・32層[図9]が直線部、2・7・8・16～18層[図8]が接続部埋土である。直線部はSD-1分岐溝・SD-4・5埋土を掘り込んでいる。接続部はSD-1側溝に切られている。接続部は上層(2・7・8層)と下層(16 ～ 18層)で堆積状況が異なり[図8]、両者は別遺構の可能性がある。

ウ．出土遺物

出土遺物は、41が瓦(燻し瓦)、42・43が陶器である[図14]。時期比定可能なものはない。

（6） SD-3

ア．遺構属性

SD-4・5埋土掘り込みでつくられた開渠の溝。調査区北側をSD- 1 と直交方向に東北東から西南西に向けて縦断する。平面形状は直線。全長は2.6m以上、主軸方位は直線部N-7°-Wである。

断面は逆台形で、上面幅は0.8m、深さは0.4mを測る。溝底の傾きの方向は南→北である。

イ．埋土

11・15層[図9]が埋土である。SD-4・5埋土を掘り込んでいる。地山より上部に作られているため、SD-1・2との前後関係は不明。

ウ．出土遺物

出土遺物は、44瓦(燻し瓦)である[図14]。時期比定可能なものはない。

（7） SD-4

ア．遺構属性

地山掘り込みでつくられた開渠の溝。調査区北側境界で検出。南側調査区外でSD-2に合流する。平面形状はは不明。直線か。全長は5.6m以上、主軸方位はN-45°-Wである。

断面形は不明。上面幅は1.3m以上、深さは1.2m以上を測る。溝底の傾きの方向は南東→北西である。

イ．埋土

13 ～ 14・16 ～ 20・22・28 ～ 31層[図9]が埋土である。SD-2・3・5に切られる。

ウ．出土遺物

出土遺物は、48・50が土器、46が陶器、51が磁器(染付)、49が瓦(燻し瓦)である[図14]。時期比定可能なものはないが、50すり鉢は17(SD-1出土)に類似する。

（8） SD-5

ア．遺構属性

地山、SD-4埋土掘り込みでつくられた開渠の溝。調査区北側で検出。当初SD-2の一部として掘削していたが、別の溝状になったため途中からSD-5として掘り上げた。平面形状は直線。全長は6.2m以上、主軸方位はN-103°-Wである。

断面は緩い逆半円形。上面幅は1.1m、深さは0.5mを測る。溝底の傾きの方向は西→東である。

イ．埋土

2～10・12・21層[図9]が埋土である。SD-4埋土を掘り込んでいる。また、SD-2直線部に切られるが、SD-2より先に埋没しただけで併存していた可能性もある。

ウ．出土遺物

出土遺物は、54が土器、55が土師器、52が陶器、53が花崗岩である。時期比定可能なものは、52が李朝陶磁碗とみられ、堺環濠都市遺跡出土例を参考にすると16世紀後半頃と考えられる（森村1985）。溝南側肩部地山直下より52陶器が底面を上にした状態で出土し［写真11］、その下から53花崗岩が出土した［写真16］。52・53はSD-5使用時の遺物と考えられる。また、54すり鉢は17（SD-1出土）に類似する。遺物からみたSD-5は16世紀を中心とした時期で、14 ～ 15世紀に上る可能性もある。

（９） SD-6

ア．遺構属性

地山、SD- 6 下層溝埋土掘り込みでつくられた開渠の溝。調査区南側3区を南北に縦断する。平面形状は直線。全長8.7m以上。主軸方位はN-33°-Wである。

断面は緩い逆半円形で、上面幅2.5m、深さ 1 .0mを測る。溝底の傾きの方向は南→北であり、SD-1上層に合流するとみられる。

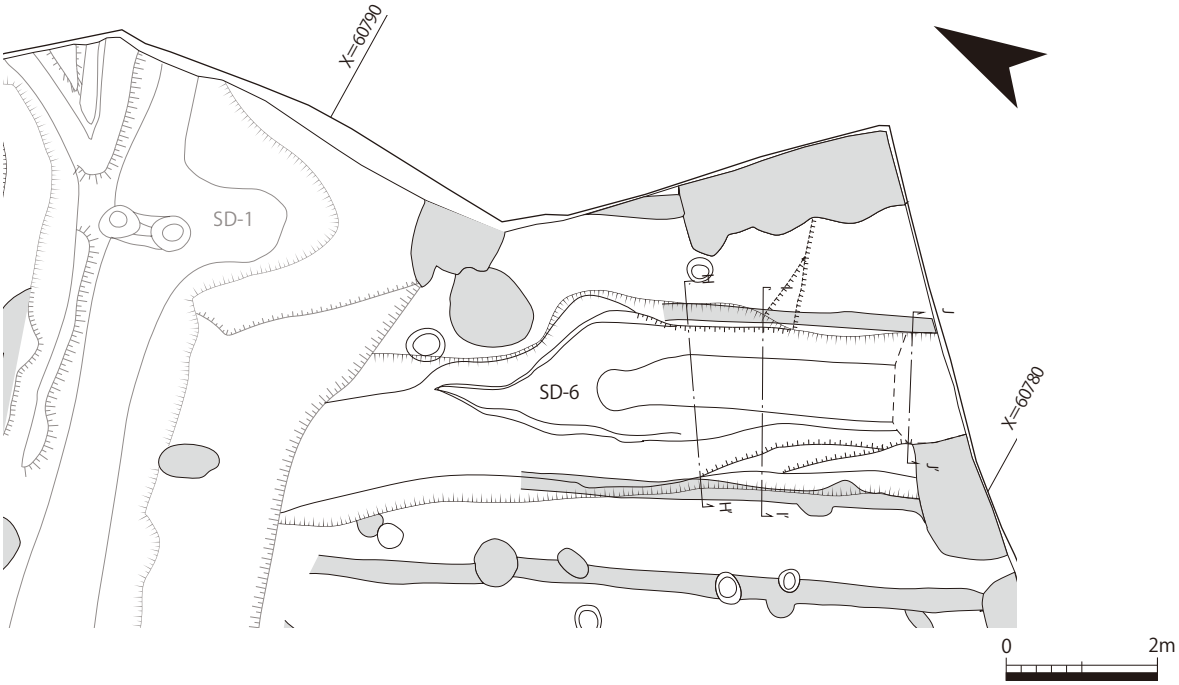


図12　SD-6平面図（1/100）

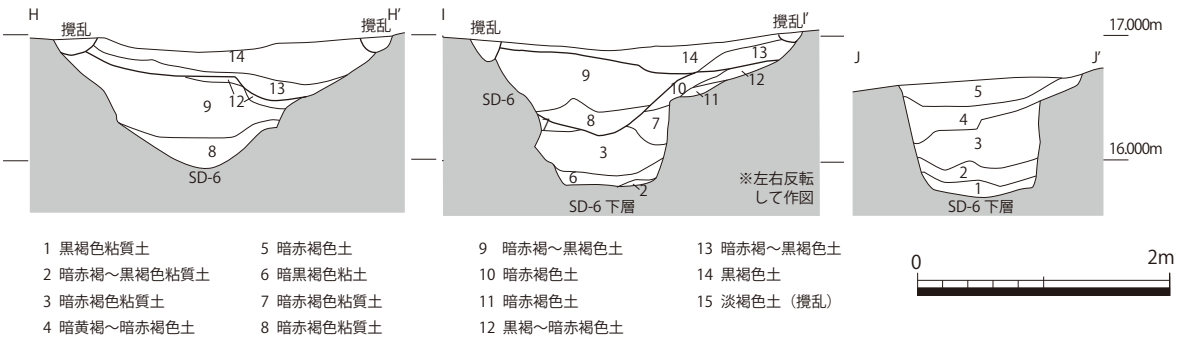


図13　SD-6土層図（1/60）

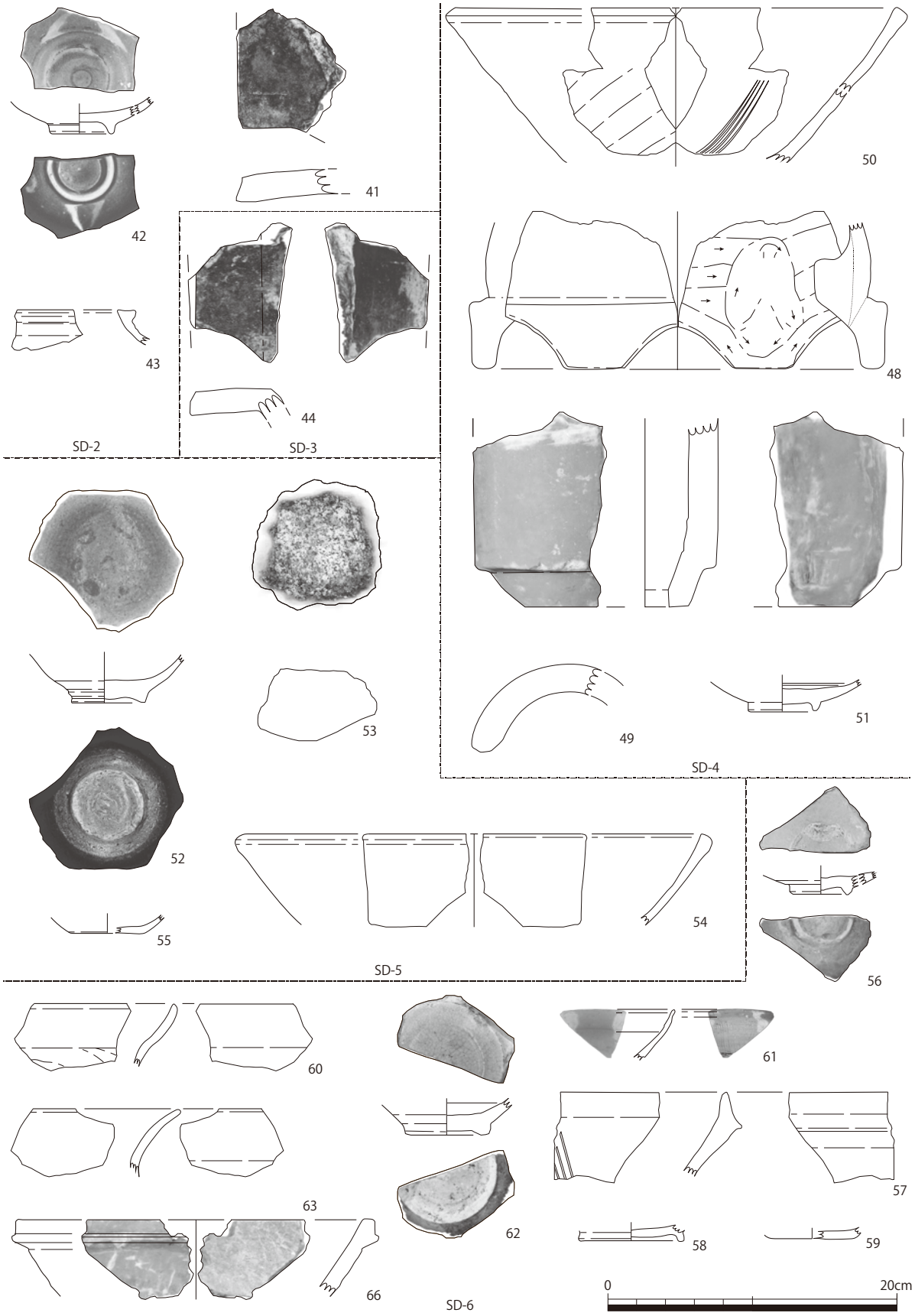


図14　SD-2・3・4・5・6出土遺物（1/4）

イ．埋土

発掘時は、H-H'断面とI-I'断面間に土層観察ベルトを設け、ベルト北側とベルト南側およびベルト内に分けて発掘を行ったが、層位的には検出面から底面まで一括して掘り上げている。土層観察の結果、下層は別の遺構と判明したのでSD-6下層溝として別項で取り扱う。SD-6の埋土は8 ～ 14層[図13]である。SD-6下層溝の埋土を掘り込んでいるがほぼ一体化しており、SD-6下層溝が部分的した後に再利用してSD-6を作ったとみられる。

ウ．出土遺物

SD-6とSD-6下層溝を一括して取り上げている。発掘時の印象では下層ほど遺物が少ないため、SD-6＞SD-6下層と判断し、ここで取り上げる。

出土遺物は、60・63が土器、59が土師器、58が瓦質土器、57が陶器、56・62が磁器(白磁)、61が磁器(青磁)、66が滑石石鍋である[図11]。

時期比定可能なものは、57は備前焼すり鉢で14 ～ 16世紀(伊藤1995)、66は石鍋Ⅲ-ｄ類で14世紀後半に位置付けられる(木戸1995)。その他は小片のため除外した。遺物からみたSD-6は14 ～ 15世紀を中心とした時期である。

(10) SD-6下層溝

ア．遺構属性

地山掘り込みの開渠の溝。SD-1下層の別溝であることが土層観察で判明した。平面形状は直線。全長3.9m以上。主軸方位はN-27°-Wである。

断面は長方形(箱掘)で、下面幅約0.8m、上面幅1.0 ～ 1.4m、深さ1.2m以上を測る。溝底の傾きの方向は北→南でSD-6と逆方向である。

イ．埋土

1 ～ 7層[図13]が埋土である。SD-6に切られる。

ウ．出土遺物

SD-6下層溝として取り上げた遺物はない。ベルト南側は上面が攪乱によって切られていることと、SD-6下層溝は南側ほど深くなるため、ベルト南側出土遺物はSD-６下層溝埋土出土遺物の可能性が高い。56・57・58が該当する。遺物からはSD-6とSD-6下層溝の間に時期差は見受けられない。

3　竪穴建物

(1) SC-7

ア．遺構属性

地山掘り込みの竪穴住居。調査区中央の1区SD-1南側で検出された。平面形状は角丸長方形、断面は底面やや丸い逆台形、長軸5.6m、短軸4.2m、深さ0.2m、主軸方位N-28°-Wである。かなりの削平を受けており、住居の床面とわずかに埋土が残ったのみである。

柱穴は住居の中央やや北東よりに1基あり。平面形状円形で、断面は逆台形、長軸0.2m、短軸0.2m、深さ0.2mである。住居外南側に竪穴外ピット1基あり。

イ．埋土

1・2・4層[図15]が埋土である。現代攪乱に切られる。他遺構との切り合い関係なし。

ウ．出土遺物

土器の小片が出土したが、図化および時期比定可能な遺物はなかった。

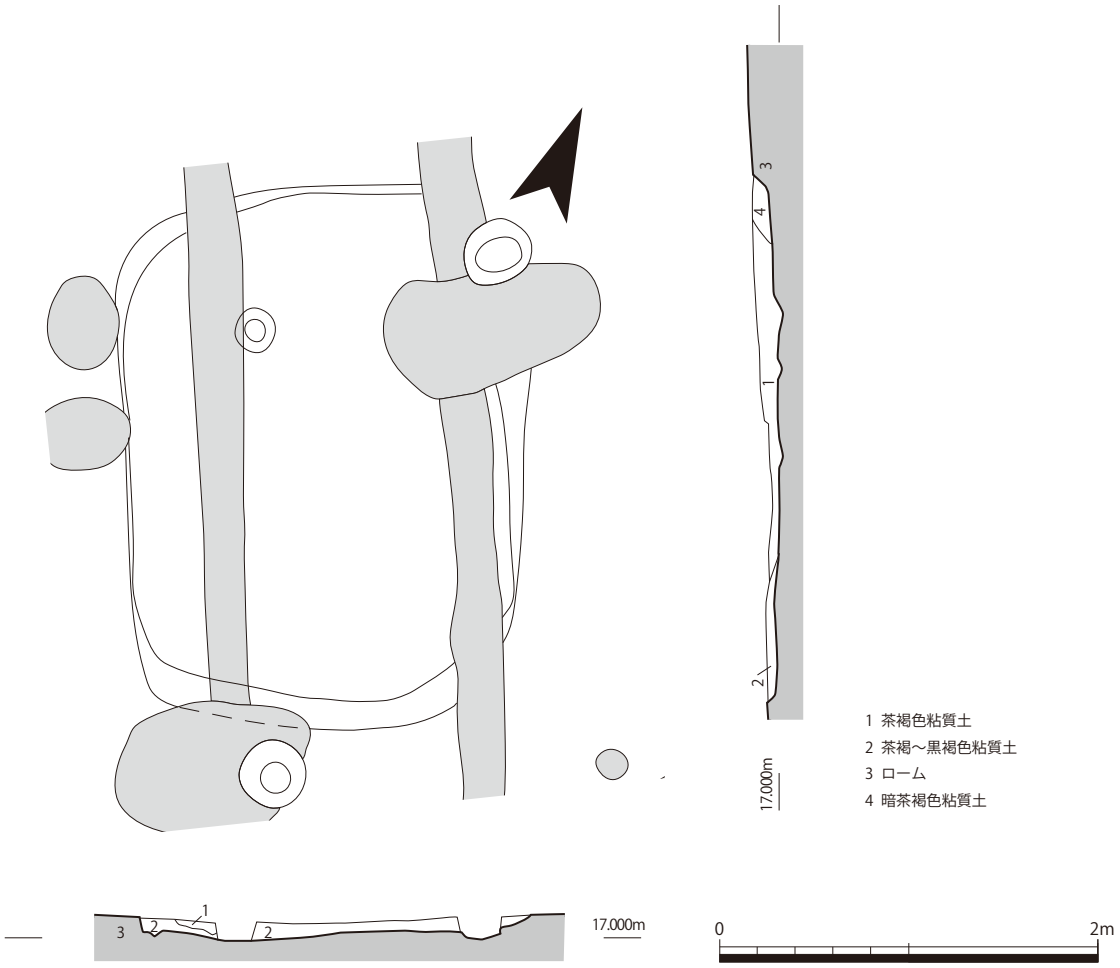


図15　竪穴建物SC-7平面図・土層図(1/40)

4　遺構外出土遺物

39陶器鉢は2区遺構検出時に出土したもので、接合はしないがSD-4出土の46陶器鉢と同一個体とみられる。現代陶器の可能性高いが時期不明。64土器釜は3区ピットSP-4出土、40滑石石錘は1区攪乱K-9出土、45・47瓦製硯は3区攪乱K-16出土である[図6]。

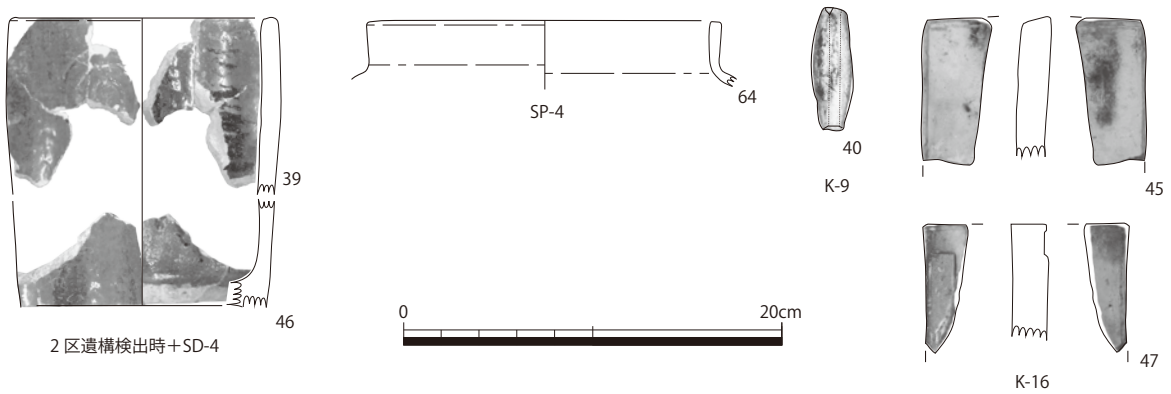


図16　ピット・攪乱・遺構外出土遺物(1/4)

Ⅳ　考察

1　遺構の時期区分と性格

本調査で検出した溝状遺構について埋土・出土遺物をもとに前後関係と時期を整理したのが別表［表１］である。8期に区分したが、年代比定については遺物の量が少ないこともあり、中世後半～中世末、近世～近現代、現代と大きな時代幅に留めた。

表には入れていないが、溝形成前の遺構が竪穴住居SC-7である。遺物が出土していないため、弥生～古墳・奈良時代としか特定できないが、最も近い麦野C遺跡5次調査で8世紀の住居跡が多数検出されていることから、この時期の可能性が高い。

1期の遺構がSD-1である。SD-4も土層で確認できないが、1期の可能性がある。SD-1分岐溝は土層で判断できないが、SD-2より古いことは土層で確認できており、1期の可能性がある。2期の遺構がSD-5、3期の遺構がSD-2直線部・接続部、4期の遺構がSD-１側溝である。１～４期の遺構は遺物の時期幅では14世紀～ 16世紀である。これらの遺構は同時期に併存していた可能性もあり、その場合は溝を2条並行して構築することで、溝1条を同幅で掘るより掘削土量を減らしてかつ同等の防御機能を有する堀切とすることを目的としたと推測される。防御力の高い堀切を効率的に築く技能を有する人物の指導によって作られたといえよう。

近世～近現代の5期遺構がSD-1上層・SD-2接続部上層・SD-3である。遺物はないが、切り合いから１～ 4期の遺構より新しく、かつSD-1上層・SD-3の平面形状が航空写真［図3］や昭和初期地図［図4］にみられる道路および屋敷地への分岐道と重なることから、この時期幅に位置付けた。

SD-6下層溝およびSD-6は他遺構との切り合いがないため遺物で判断すると、１～ 3期のいずれかに位置づけられる。ただし、SD-6がSD-1上層と合流するようにみえることから、SD-6は4～ 5期に位置付けた。

現代は機械耕作の攪乱＝畑地を6期、溝上面まで6期攪乱が伸びていないため溝廃絶後の旧表土層＝7期とする。6・7期は昭和50年の区画整理以前である。8期は区画整理後の宅地にかかる攪乱・表土である。

2　資料からの検討

ほとんど遺構の見られなかった調査地点に中世後半～中世末にかけて突然大規模な溝SD-1とそれに

表1 麦野C遺跡第19次調査遺構時期区分

<table>
<tr><td></td><td colspan="4">中世後半～中世末（戦国期）</td><td>近世～近現代</td><td colspan="2">現代（区画整理前）</td><td>現代（区画整理後）</td></tr>
<tr><td>時期</td><td>1期</td><td>2期</td><td>3期</td><td>4期</td><td>5期</td><td>6期</td><td>7期</td><td>8期</td></tr>
<tr><td rowspan="3">1区</td><td colspan="3">SD-1</td><td rowspan="3">SD-1側溝</td><td>SD-1上層</td><td rowspan="6">畑トレンチャー</td><td rowspan="4">溝廃絶後の旧表土層</td><td rowspan="4">現代表土</td></tr>
<tr><td colspan="3">SD-2直線部</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">SD-2接続部</td><td>SD-2接続部上層</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2区</td><td colspan="2">SD-1分岐溝</td><td rowspan="2">SD-2直線部</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">SD-3</td></tr>
<tr><td>SD-4</td><td>SD-5</td></tr>
<tr><td>3区</td><td colspan="3">SD-6下層溝</td><td colspan="2">SD-6</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>遺跡性格</td><td colspan="4">中世城館</td><td>道路と麦野原</td><td colspan="2">道路と畑</td><td>宅地</td></tr>
</table>

関連する複数の溝がつくられたのはなぜか。また、溝SD-1が埋没した後も上部に溝SD-1上層が作られたのはなぜか。

最初の参考資料は地名である。本調査地周辺はかつてイガマグチという小字だった。佐賀県鳥栖市牛原町にも同名の小字があり、筑紫氏居城の勝尾城の入口にあたる場所で、「構口」＝山城関連地名の可能性が指摘されている（鳥栖市教委2003）。本調査地周辺にも城館の構口があった可能性が地名から推測される。

次の参考資料は中世末の戸次鑑連と立花宗茂の事象を記した城戸清種『豊前覚書』である。「天正九年辛巳三月六日、那珂郡の内麦野村に御捕誘（こしらえ）成され候。其の子細は、広門衆那珂の郡へ節々乱妨に出申し候間、そのおさへとして、人数を籠め置かれるべきためなり。」とあり（川添ほか1980）、筑紫広門の軍勢が1581年頃しばしば那珂郡に収奪に現れたので、その防衛として軍勢を留めおくために戸次鑑連が麦野村に捕誘＝簡易な城を作ったという内容である。

麦野村にある中世城館としては麦野A遺跡6・8・9・12・18・20・23・24次調査で中世の溝に囲まれた大きな方形区画（東西約110m、南北約150m）が見つかっており、『豊前覚書』記述との関連がすでに指摘されている（久住2017）。しかし、麦野A遺跡城館は13世紀～ 14世紀頃の溝で内部に貯蔵穴や掘立柱建物など定住性があり、継続的かつ地域の核となる居館としての性格が認められる。これに対し、麦野C遺跡本調査および周辺事例では中世の住居関連遺構は少ない。諸岡B遺跡でも方形区画の平地城館と、丘陵上の区画溝・地下式横穴という遺構の性格の異なる2つの中世城館が400mの距離を隔てて発見されており、本調査例と麦野A遺跡城館との関係もこれに類似する［図17］。

また、中世城館には山城、平地の居館以外に防塁など、城館とは別に防御施設のみが単独で存在する場合もあり（文化庁・奈文研2013）、本調査の溝は遺物も少なくこれに性格が近い。『豊前覚書』にみえる「麦野村御捕誘」は戸次鑑連が筑紫広門の軍勢からの防衛のために急造したものであり、麦野A遺跡城館より本調査の溝の方が遺構の性格としては合致する点が多いといえる。

3番目の参考資料は江戸期福岡藩編さん地誌の青柳種信『筑前国続風土記附録』である。「麥野村」の記述には、麦野村の民居は本村・捻藤（ねじふじ）・学教の3か所にあること、捻藤町は宰府往還の左右にあること、捻藤町の宇田天神社大日堂には嘉暦三年八月八日妙圓青蓮覚雲尼と彫った石佛があること、麦野には福岡より秋月宰府等にゆく間道に「麦野原」があり、春日原の北に続いていて、この原に元文の頃（1736 ～ 1741）松を植えて今は林となっていることが記されている。

この記述から北東約70mの日吉神社にある嘉暦三（1328）年造立板碑は本来捻藤町（現在の福岡県道112号沿い麦野6丁目付近）にあり、中世において調査地周辺に板碑を造立し得る階層が存在していたことの証拠にはならないといえる。また、福岡より秋月宰府等にゆく「間道」とは旧雑餉隈で宰府往還から東に分岐し薬院に向かう中道［図17］とみられるが、調査地を含めた麦野C遺跡一帯は近世には「麦野原」と呼ばれた原野もしくは松林だったとわかる。明治34年の地図に見える捻藤から八幡に伸びる点線の道［図17］も麦野原を横断する江戸時代のいくつかの間道の一つに起源をもつものではないだろうか。麦野村が大宰府方面と薬院方面に通じていることは、肥前国勝尾城(佐賀県鳥栖市)を本拠とし、大宰府と那珂川の両面から那珂郡に侵攻してくる筑紫広門の軍勢への防衛拠点を築くのに適した立地だったといえる。

「麦野村御捕誘」は少なくとも天正15年（1587）の九州国分には廃城されたと考えられ、城館としての実働は6年間と短期であった。仮に本調査地の溝が「麦野村御捕誘」であったならば、城館の役割を終えた後も、その堀切は麦野原の台地を縦断する道路として江戸時代から近現代まで地域住民に利用され続け、昭和の区画整理でその役目を終えたといえるだろう。

Ⅴ　引用文献

伊藤晃 1995「備前」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

小野正敏 1982「14 ～ 16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№2 日本貿易陶磁研究会

川添昭二・福岡古文書を読む会校訂 1980『筑前博多史料 豊前覚書』文献出版

木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

久住猛雄 2017『麦野A遺跡9』第1323集 福岡市教育委員会

鋤柄俊夫 1995「瓦質土器(各地の瓦質土器)」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

立石堅志 1995「奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

鳥栖市教育委員会 2003「鳥栖市誌編さん事業 中間報告」『市報とす』№983 鳥栖市

文化庁監修・奈文研編 2013「第Ⅴ章 城館の調査」『発掘調査のてびき―各種遺跡調査編―』同成社

森村健一 1985「堺環濠都市遺跡出土の李朝陶磁器」『貿易陶磁研究』№5 日本貿易陶磁研究会

山本信夫 1992「第三編第六章第一節 土師器」『太宰府市史 考古資料編』太宰府市

山本信夫 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ-陶磁器分類編-』大宰府教育委員会

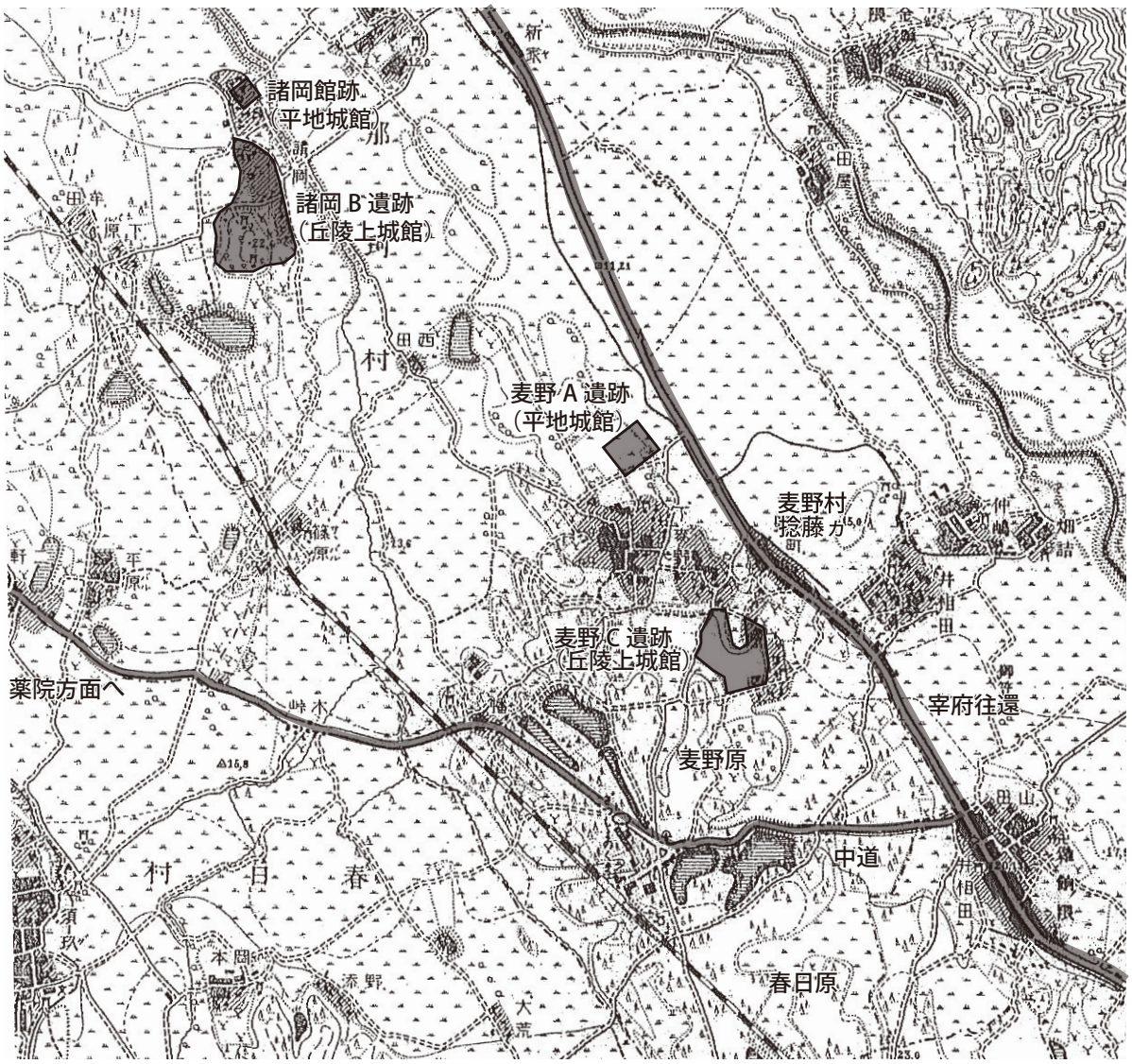


図17　関連遺跡位置および地誌地名・道図

地図は明治34年製2万分の一地形図「博多」を使用

写真1　SD-1・2・3・4・5合成写真（上が北東）

写真2　1区全景（北東から）

写真3　3区全景（北西から）

写真4　2区全景（南西から）

写真5　1区溝SD-1・2（南西から）

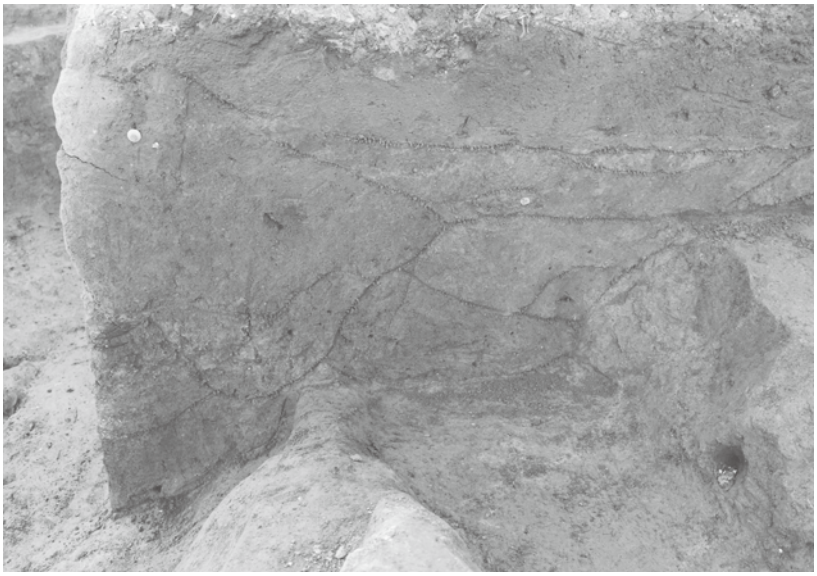


写真6　1区SD-1・2土層A-A′
（北西から）

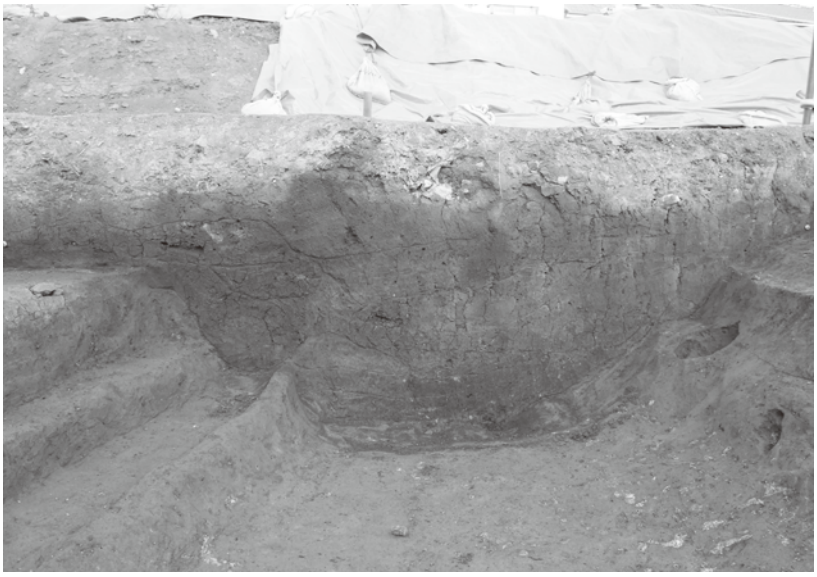


写真7　1区SD-1・2土層B-B′
SD-1部分（南西から）

写真8　1区SD-1・2土層B-B′
SD-2部分（南西から）

写真9　SD-1・SD-1側溝
（南西から）

写真10　SD-2・SD-2接続部
（北東から）

写真11　SD-5土層C-C'・遺物
No.52出土状況（南西から）

写真12　SD-1分岐溝および
SD-1ピット列②（北東から）

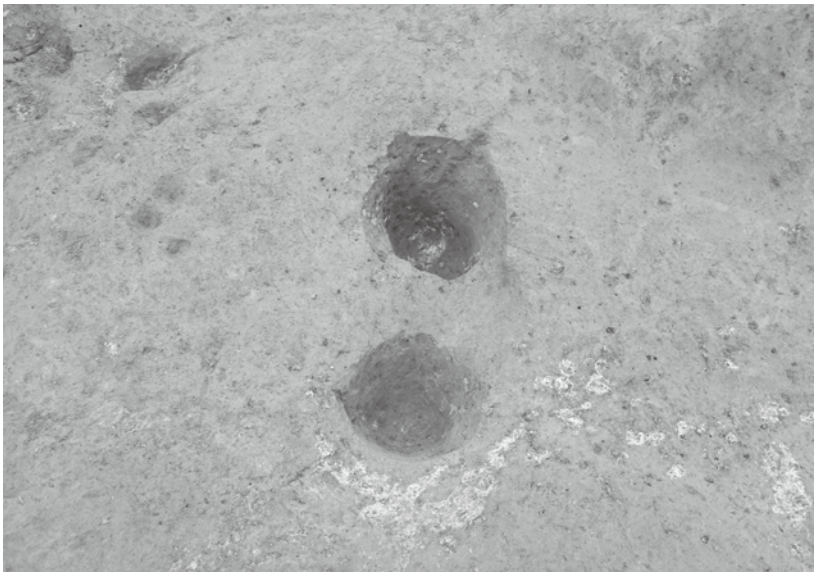


写真13　SD-1ピット列②（南から）

写真14　2区SD-3・4土層D-D'・
SD-4土層G-G'・
SD-4完掘状況（北東から）

写真15　SD-2・4・5完掘状況
（南東から）

写真16　SD-5花崗岩（遺物№53）
出土状況（南西から）

写真17　SD-6土層H-H'（北西から）

写真18　SD-6土層I-I'（南東から）

写真19　SD-6土層J-J'（北西から）

写真20　SC-7完掘状況（南から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	むぎのしーいせき12
書　名	麦野Ｃ遺跡12
副書名	第19次調査の報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1465集
編著者名	赤坂亨
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2022年３月24日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号	（世界測地系）				
むぎのしーいせき 麦野Ｃ遺跡 19次	はかたくむぎの 博多区麦野６丁目12-12	40132	0050	33.3348	130.2754	20201012～ 20201218	296㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
麦野Ｃ遺跡19次	集落・城館	中世、近世、現代	溝、竪穴建物、ピット	土器、土師器、須恵器 磁器、陶器、瓦、滑石

要約

麦野C遺跡は福岡平野南部の丘陵上に位置し、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市域の最南部にあたる。本調査地点は遺跡中央部にあたり、東西からの谷筋が入り込む付け根部分中央からやや北側に位置する。遺構面は攪乱土壌を20～40㎝ほど除去した鳥栖ローム上面で、標高は17.0～16.7ｍである。検出した遺構は溝６条、竪穴建物１棟、ピットである。溝は東北東から西南西方向へ下る溝3条と、南から北方向へ下る溝２条と北北西から南南東へ下る溝１条がある。竪穴建物１基は削平を受け遺物もわずかだったため、時期不明であるが、近隣調査例から８世紀代の可能性がある。畑の耕作機械であるトレンチャー痕跡が南側の調査区全体に残されており、区画整理以前は畑地であったこと示している。溝の遺物は少なく、中世～近世を中心とする土器・陶磁器等や古代の須恵器が破片で出土した。溝は中世城館の堀として作られ、近世以後も道路として用いたとみられる。

麦野Ｃ遺跡12

第19次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1465集

2022（令和4）年3月24日 発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷　川本印刷株式会社
〒810-0888 福岡市博多区板付二丁目5番20号